

<講座番号 D>目の前の子どもから創る障がい児体育授業

目の前の子どもから創る障がい児体育の授業

辻内 俊哉（大阪支部・府立泉南支援学校）



1. はじめに

今年、17年間もの長きにわたり勤めてきた前任校から、新しい支援学校に転勤し小学部の配属になりました。知的障害支援学校の小学部は、私にとって初めての場です。早期教育のむずかしさを感じつつ、そんな中でもどんどん変容を遂げていく子どもたちの姿に、感動すら覚える毎日です。

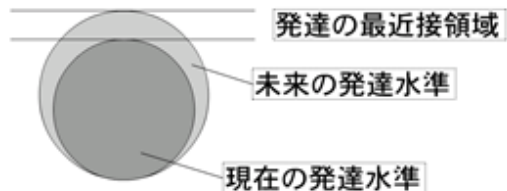
2. 「わかる・できる」を中心に

今まで私自身の中心的課題は「子どもたちはわかればできる。どうすればわかりやすい教材を準備できるのか」というものでした。そのためにスモールステップを重視した学習内容、「あそび」を中核とした教材開発、アフォーダンスの視点での教具の工夫を意識してきました。アフォーダンスとは簡単に言えば、「物はいろいろな情報を発信していて、それらの情報は体の動きを引き出しやすい」ということです。「場の設定と同義語では」との質問も受けますが、「場の設定」は運動課題の順序性などを中心に見通しを持たせることが主たる目的になりますが、アフォーダンスは、その道具が持つ情報が即、子どもたちから情報に応じた動きが現れます。アフォーダンスの知識があれば、教師の期待する体の動きを引き出

しやすくなるのです。

3. 「発達の最近接領域」の理論

それから、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の理論が私の指導観を後押ししました。子どもの「わかる・できる」には完全に自分一人の力でできることと、支援を足がかりに「わかる・できる」が実現する二つの発達水準が存在します。



一つは「現在の発達水準」と言われるもので、自主的活動において可能な問題解決の水準であり、もう一つは「未来の発達水準」と言われるもので、大人の指導や援助のもとで可能な問題解決の水準、すなわち、近い将来自力でできるようになると期待される力です。

そしてこの食い違う二つの発達水準に挟まれた領域を「発達の最近接領域」と規定し、この領域の中で行われる学習活動こそ、子どもたちの発達に働きかける中身を持っているとのです。

私たちは使命感からつい「できないことを

できるようにさせたい」と思いますが、「できないこと」や「わからないこと」を繰り返し続けるだけでは教育効果は薄く、むしろ子どもの劣等感を増徴してしまう可能性もあります。そこで子どもに向き合う指導の基本をちょっと視点を変え、次のように考えていきたいです。

- 「できる」ことにしっかり取り組むことで、失敗ばかりで自信が持てない子どもたちが自信を持つ。
- 「成功体験」の蓄積により、子どもたちの「もっとやりたい」という気持ちが高まる。
- 子どもたちの活動が自主的に広がり、いろいろなことへの挑戦が始まる。
- 広がると「できそうでできない場面」が出てくる。
- その場面での葛藤が「発達」のエネルギーとなる。
- ここで適切な支援が得られると、乗り越え、成長することができる。

4. 教材づくりの視点

「子どもが学びたいこと」と「教師が伝えたいこと」をつなぐものが教材です。障害のある子どもたちにとって、既存のスポーツをそのまま学ぶことは難しく、さまざまな「運動文化」の中から、子どもたちが学びやすいよう再構成して「教材化」する必要があります。そのために必要な視点をいくつか挙げていきます。

(1) 子どもの実態に応じた教材

「子どもたちにこういう力がついてほしい」と、私たちは教育目標を立てていきます。その時、ややもすれば教師の理想や願いが強くなりすぎてしまいます。「できることをたっぷ

りくぐらせる」中での課題設定が必要です。

(2) 課題設定をスモールステップで

子どもたちは一つの学習場面の中から1つの課題を学ぶことで精一杯です。学習内容や課題がいくら系統的であっても、場の設定がころころ変わってはわかりにくい。学習内容の中核となるものを初期にメインで勝負です。

(3) 「アフォーダンス」の視点

前述してありますが、教具の置く位置、ライン一本で子どもたちの動きはものの情報を感じ、変化します。

(4) 「手ごたえと達成感」そしてフィードバック

教材が子どもたちにとってどうだったか、子どもたちはどんなときに生き生きするのか、障害児体育分科会では一つのキーワードとして「手ごたえと達成感」を重視しています。

5. 子どものねがい

以上、私が長年に渡り学んできたことをまとめました。しかし、それらは子どもたちの「わかる」「できる」を保障はするけれども、授業方法論の域を超えていないと感じはじめています。昔、中村敏雄先生が「うまくしてどうする？」と投げかけたことが蘇ってきます。子どもがわかりやすい、取り組みやすい教材を用意するだけでは決定的に何か足りないのだと思います。

そんな折、今の小学部の子どもの姿を見てみると、改めて実に多くの発言をしていることに気づかされます。子どもたちは楽しいと思えることを追求する力があります。日常のさりげないことに楽しさを感じる力があります。そして、そのような活動を「もっとやりたい」と発言する力があるのです。「子どもの願い」と私たちの思いの先に答えがありそうです。